

女神に転生特典もらつ
たんで滅びの運命に逆
らってみる

ゼロ・アース・コア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なんやかんやあつてシンフォギアの世界に転生した時野 イクサ、だが共に転生した
園崎アルトが転生特典のひとつ（自分の意志で使えない）未来予知でこの世界が三年後
くらいに滅んでしまうことが明らかに!?とりあえず政府に報告しても、「こいつ、大丈夫
か?」で済まされるので自分たち二人で滅びの運命に逆らってみることにした!!

この物語は『歌姫たちと歌えない戦士の物語』のもしもイクサたち（イクサ以外はア

ルトのみ）がシンフォギアの知識をもつてなかつたらっていう作者が『歌姫たちと歌えない戦士の物語』の話を考えてたらなんか思い付いた話をかいちやつた物語です。なぜかこつちの方が話が組めてるのでこつち優先するかも？

目次

V S シンフォギア 編

第1話 わりい…しくじつた（；ω；）

1

オリ主ズ設定+α（2019年8／

12

18 大幅改定）

第2話 激闘？大脱出!!（△、）

18

第3話 想定外をかかえて帰宅

36

第4話 滅びへのカウントダウン

44

V S シンフオギア編

第1話 わりい・しくじつた（；ω；）

オリ主ズS I D E

「あーあー、こちらエージェントT侵入成功」

『了解、そつから三階層まで降りたら目的のものがある』

「おK」

この物語の主人公である時野イクサはとあるものを回収するために深淵の竜宮に入っていた

『もつかいきくけど、なんであれ公園になげたし』
「公園にいたときに体から出てきたから」

そう、イクサとアルトは転生特典でアース・コアと呼ばれる地球の自然の力が擬人化し、その擬人化した女性が認めた者にしか使えない聖遺物らしき物をもらつた。（色は違うが待機状態だとシンフオギアそつくり）だがイクサは認められ過ぎたのかその擬人化した女性と適合ではなく体の中に入られて融合してしまつた。そのせいでたまに体からぽろっとコアの欠片が出てきてしまうようになった。

それをいつもなら誰かに拾われて研究されたくなかったからもってかえつていたのだが公園にいたため気が抜けていたのか、放り投げてしまったのだ

そしてカクレンボ中の子供にそれが拾われて「なんか点滅してるよー」「えつ!?とつ！とりあえず博物館いきましょ!!」つてことで調査されて大惨事に。

この小ささでこれだけのエネルギーがあるつてことでその公園が採掘されたりして結果SONG預りになり深淵の竜宮に厳重保管された。これが一年前にイクサの油断で起こつた出来事である。

『ほんと二年前に捕まらなくてよかつたよな、あの大騒ぎみると』

「俺はあれでゼロに頼んで欠片が出ないようにしてもらつたんだぜ、世の中のエネルギー問題つてほんと大変だよな（他人事）

『はあ、お前はいつも通りだな：つとそこから4つ先の部屋に保管されてる』

「へえ～ここか」

イクサは扉の前に立つてゐる：が何故バレてないかというとゼロ・コア通称ゼロの能力で透明化してゐるからなのだ

『念のため聞くがそれどういう鍵だ？』

『パスワードとカード、あとこりやあダイヤルか？』

『面倒だな、まだ透明化解くなよすこし時間かかるがバレずにハツキングしてパスワー

ドとか探すから』

「了解、とりあえず放出エネルギーもまだ遮断しとくぞ」

『おう、油断すんなよ』

一ブツー

～五分後～

『できたぞイクサ、パスワードは■■■■■■■■でダイヤルの方は■■■■だカードは

『ここを出発するまえに渡したやつでいい』

「了解ーポチポチポチポチポチー」

～イクサ扉開放中～

「よし開いたぞ、おーおーかなり厳重に保管されてんな」

『さつき調べたらそれのパスワードがかなり難しいからお前の脳にパスワード送るわ』

「へ？ ちよおまギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

アース・コアの適合者、融合者たちはその特殊性から自分ではない適合者、融合者に
生体的なリンクが可能だ

対象に自分のエネルギーを与えたり、視界を共有したりできる。その範囲は広く、脳
にもつなぐことができ今アルトがやったのは自分がみたパスワードをそのままイクサ

の脳に直接送ったのだ。だがコア適合者、融合者でも脳に干渉するのはタブーだ。

人間の脳は己以外の認識しているものが入り込んでくるとそれを異常と判断し、脳が激痛を発する。

だが、なぜアルトがこうなることを理解していくて迷いもなく行つた理由はイクサがコア融合者であり、融合の影響とイクサの二つ目の転生特典の代償はあるが無限の自己再生能力のことを知つていてからこそだ

「お前アホなん？お前俺、言つたよな許可なく唐突にこれだけはすんなってさあああ！」

『ふつははははははは！』

「お前、俺がミスつても知らね：あつ」

イクサは大量の冷や汗を流しはじめる

『どうした？まさかほんとに…』

『パスワード…ミスつた…』

一ビツ――ビツ――ビツ――

「アアアアアア!!やらかしたアアアアアア!!!」

『ふつざけんなよイクサアアアアア!!「ドン!」「ポチッ」あつ…やべつ…逆探知された

…』

「… (· ω ·) 」 『… (· ω ·) 』

「『アアアアアアアアアアアア!!』

ちなみにこの二人組、片方がやらかすと釣られるようにもう片方もやらかすポンコツタッグである

SONG SIDE

「深淵の竜宮に侵入者だとお!?

イクサたちが発狂してる頃、SONGは慌ただしくなつていた

「はい、大きさに比例しないエネルギーをもつた謎の欠片、通称サファイアを保管してる場所に突如として現れました」

「なにつ!? 深淵の竜宮のセキユリティはかなり厳重なはずだ! そんな簡単にはバレずにそこまで侵入できないはずだぞ!」

「こちらのデータ保管セキュリティがハッキングされていました、こちらも何の前触れもなくセキュリティを突破された状態でハッキングされているというのがわかりました」ハッキングしていたアルト、侵入したイクサどちらもハッキングも侵入もかなり高レベルでできるがハッキングにかんしてはアルトが一枚上手なのでアルトはほとんど裏方に徹している。その一枚上手なのがバレずにハッキングすることである（はいそこバレずにハッキングとか不可能とか言わないアルトだから出きるのだ）

「逆探知は？」

「とつぐに探知済みです、ここは深淵の竜宮付近の海上ですね」

「そのまま続けてくれ」

「了解！」

「そして……だ」

SONGの司令である風鳴司令は深淵の竜宮に侵入した人物が映っているモニターを見る

「あの侵入者は……確実に異端技術所持者だ」

それに一番に反応したのはその弟子である立花響だ

「え？ シンフォギアじゃないんですか？」

「ああ、アウフヴァアツヘン波形が確認されてない。だがあの姿をみるにただ者ではない

のは確かだ』

そう監視カメラに映つてゐるイクサの姿はゼロを纏つた姿だ。そしてこの場にいる誰であろうとその姿を見ればただ者ではないのは理解できる。

「というわけで、だ、出撃して彼を捕縛してもらいたい。普通ならただの才能を無駄遣いしてゐる犯罪者になるが、異端技術をもつてゐるなら話は別だ」

それに続けて風鳴司令と同じ名字をもつた女性が反応する

「ことが済んだらSONGに所属することになるからですね」

「そうだ、彼が犯罪者になるせよ異端技術をもつてゐるならこちら預りになる。そのためにも君たちシンフォギア奏者に捕縛してもらいたい」

「その話はいいけどよ抵抗したら氣絶でもさせりやあいいのか?」

その質問は銀髪の巨乳であろう女性から発された

「構わないがあまり傷つけるなよ、やりすぎるところちらもとがめられる」

それに返事を返したのは

「了解デース!」

金髪の元気そうな子(常識人?)だ

「では改めてシンフォギア奏者全員に伝える! 協力し深淵の竜宮の侵入者を捕縛せよ

!」

ちなみにイクサは覚えていることなら一秒足らずで口に出せるくらいには脳のレベルが高い。つまりパスワードを与えられたならほとんどのパスワードなら数秒で完了するのだが、しかしパスワード……長い!!

普通なら人間はイクサの速度でパスワードを入力すると脳が300文字程でショートする

それを10分で一万文字を打ち続いているイクサの脳がそれほどレベルが高いことがわかる

「あと半分んんんんんんんん!!」

『あ！イクサ！』

「なんだよ!?」

『俺、撤収するから』

「アルドサン!? オンドウルウラギッタンディスカ!?」

『冗談だ、PCを拠点に置いてくるだけだ』

今、アルトがいるのは仮拠点である

『わかった!! たぶんシンフォギア奏者が到着するくらいには終わる!!』

『だめじやんそれ…』

『そのための仮面だろ?』 ポチポチ…

『そうだつたな…』

「じゃ頑張るわ」

『おう、捕まるなよ』

「捕まつたら頼むわ」

『冗談じやねーぞ!?

一ブツッ

（10分後）

「おわったああああああああああああ!!」

一ガチヤン

イクサはコアの欠片をとり、仮面をつけ扉へと向かう
ガード音を立てて扉が開く

そこには

「よう盗人さんよ」 ジャキ（銃を構える音）

「悪いがそれは返してもらうぞ」 チヤキ（刀を構える音）
「おとなしく捕まつてくれるといいなあ～つて…」

シンフォギア奏者が三人いた

（あ、信号機組か…ちよいと詰みかなこれ？）

オリ主ズ設定+α（2019年8／18大幅改定）

時野ときの
いくさ
戦

身長：175cm 体重：68kg

容姿はドラゴンボールの少年期悟飯を髪型変えずに成長させた感じ

サイヤ人の肉体

女神からもらった転生特典その1。超サイヤ人2までとりあえずなれる。（3、4、ゴッド、身勝手は無理）

簡単に惑星を壊せるヤバさからあまり変身しない

シンフォギア奏者との戦いでは特に

一ゼロ・コアー

滅びの運命をアルトに聞いてから真面目に修行しだして山籠り行つた時に寝床として使つていた洞窟の奥からきこえた声に誘導されたり着いたのがゼロ・コアの保管場所であり、その時に融合

ゼロ・コアで現時点でイクサがなれる姿を紹介

モード：アクセル

20秒間だけ自分の肉体のあらゆる速度を2000倍にする
20秒だけなのは体への負担が大きいから（これといった負担はなくすつごい疲れる
だけだが使いすぎると過労でぶつ倒れる）

コアのエネルギーをフル回転させるため、そのエネルギーが体からあふれる（イクサ
の場合蒼い色）

モード：バースト

体の中にあるコアエネルギーをめっちゃ活性化させ、出力を大幅にあげる（イクサの
場合白を基調とした蒼い結晶のうめこまれたコアアーマーの色が反転し、蒼を基調とし
た白い結晶がうめこまれたコアアーマーに変化する、またきてるジャケットとズボンも
白のラインが入る）

活性化の影響で体のまわりをバチバチと稻妻が走り、これもエネルギーが体から溢れ
ている

2倍、4倍と界王拳方式で出力を倍増できる

ただし、コアを解除したとの疲労が大きい、なお修行でこの疲労は大幅に軽減する
ことができる

モード：オルタナティブ

負の感情を制御し、発動するモード（超サイヤ人に自由になれるんだから負の感情くらい制御できるよねという謎理論）

本来コアは人の生きるという意志や誰かを守る意志というような正の感情に反応して展開されるがこの作品のオリジナリティはコア自体にかなり気に入られているため、コアが己の適合、融合者の意志を尊重しているからこそできた姿

シンフォギアで言うイグナイトというコンセプトなので黒くなります
負の感情の制御を外し暴走させることもできるがその場合誰かにおもいつきり殴り付けてもらわないと暴走したまま

最大出力は70億の絶唱のエクスドライブモードを軽く凌駕する

モード：ディバイド

コアの出力を限界をこえて抑えて戦う姿この姿の状態のまま他のモードになれる
シンフォギアと戦う時はすべてこの姿

外見の変化はなし

まだなれない姿の紹介

モード：超進化

進化するとアーマーの白い部分が黄金化し、刺々しくなる
元ネタはジャンプ黄金期時代アニメのあれ

イクサのこれまでの行動

原作開始18年前にアルトとシンフォギアの世界に新しい命として転生。

普通の家族の一員としてそれぞれの家で過ごすがいろいろあって再会。

もちろんのこと原作知識がないので立花響たちとは第1話まで関係を持たない。だが一度だけ原作介入をしてしまっている（その話はその時に）

特に転生して10年間はなにもなくただアルトとかるーく修行をしていたが突然未来予知したアルトからこの星が滅ぶと聞いたから少し焦り、修行をはじめにやりだす。このときコアと遭遇し、星の守護者たちのことを知る

その8年後にその滅ぶ原因に遭遇し、二年後に行動に移すと言われたから「お前をぶつ殺して俺は俺の人生を生き抜ぬいてやらあ!!」と宣言した

その二年後、ちょっと気が抜けて深淵の竜宮に行くはめになった

園崎 有人と
そのざき あると

身長：173cm 体重：67kg
容姿は未來悟飯

サイヤ人の肉体

女神からもつた転生特典その1

イクサと変わらず超サイヤ人2までなれる

尻尾はどうしてるかつて？服のしたで腰にまいてるイクサも同様

－フレア・コア－

イクサと同様に滅びの運命発覚後に修行を眞面目にしただしたとき、とある山の洞窟で発見しそのまま適合（イクサとは別の山）

名前の通り炎をつかさどるコア

イクサと同じモードを搭載？している

－未来予知－

女神からもつた転生特典その3

自分たちに降りかかる厄災だけ予知する能力

この能力で滅びの運命を知る（その信用度は女神の未来予知能力の一部をもらった能

力なので必ず起る）

アルトのこれまでの行動

イクサと同様だがイクサより機会やインターネットに強いので（イクサも政府のパソコンをバレずにハッキングできるくらい強いが）大体、裏方でイクサのサポートをしている（第1話参照）

未来予知で滅びの運命を知ったのでその日はイクサとテンヤワニヤしたが対策のためにとあるものの開発と修行をした
とあるものはまだ試作段階らしい

時系列

A X Z 後でよくね？（適當）

まあ、最後にフォニツクゲインじやないエネルギーを絶唱で束ねてそのバックファイ
ヤをダイインスレイヴに肩代わりさせたせいでイグナイト使えなさそうだからシンフォ
ギア奏者側の強化しやすいしね

第2話 激闘？大脱出!!（一、二、三）

三人称SIDE

「さあ、その左手に握っているものを返してもらおうか」

沈黙を破つたのは青い髪の少女?だつた

「悪いがそれは聞けない相談だ」

（あー面倒だー!）

その質問を困つた顔（仮面で見えない）でかえすのは青い仮面の男

「な、なら!それを奪いに来た理由を教えてください!」

「お、おいバカ!!」

それを追うように質問を飛ばすのは短髪の少女、そしてそれをバカと呼ぶ巨乳の少女
「…悪いがそれもできない」

質問に答えるイクサはこの状況をどう切り抜けるか考えていた

理由は簡単ここが三階層だということ

ここまで三人だけで来たということはまだ上に三人いるのは確定している

「ならば、ちからづくでとりかえすまでだ!」

その言葉を聞き、構える三人の少女

だがその言葉を待つていたかのようにイクサは足に力を入れて
一バンッ!!

床を蹴つた

「なつ!? 消えた!?

突然男が目の前から消えたことに驚く防人
ーズザアアアア!!

その音に反応し、ガトリングを放つ特盛

「後ろかあ!!

一ダダダダダダ!!

「ダメッ! クリスちゃん!」

「しまつ!」

それを制止する大盛

がガトリングから放たれた弾は

ースツ

男を通り抜けた

「おっほ、危な」

まるでガトリングの弾が通り抜けてから危なかつたと氣づく素振りを見せるイクサ

「なにつ!?通り抜けたあ!?」

「やはり指令の推測はあたつていた！やつはタダ者ではない!!立花!!」

「はいっ！」

一ダツ！

二人がイクサに向かつて地面を蹴る

「はああああああ!!」

一キンッ!!

一ドツ!!

イクサは向かつてきた刀と拳の両方を片腕ずつで受け止める

「重たつ!!くつ…ダア!!」

それを押し返し、耳に手をかざし通信する

「おい、アルファ！シンフォギア奏者と遭遇した！予定時刻より遅れる!!そこらへんは
なんとか隠れててくれ!!」

『了解だ、バレないように善処する』

「善処する、じやなくてバレるなよ!!
「通信などしている場合か?」

問答無用で防人が刀を振り下ろす

「うおつ!!」

「キンッ!!

「やはり、後ろ楯が居たようだな!ならばよりお前は捕まらなければならなくなつたな
!」

「キンッ!!キンッ!!キンッ!!

イクサを防人の連撃を軽く防ぎながら叫ぶ

「後ろ楯とかいう大層なもんならよかつたんだけどなあ!」

拳を握り、そのまま殴る

「ギィイイイイン!!

「ぐつ!!」

その拳は防がれるものの、その拳の重さに防人はかなりの距離を後ずさる

「翼さん!?はああああああ!!」

「シユババババ!!

「パンパンパンパン!!

短髪の少女がラツシユを繰り出すも全て男に受け止められる

「下がれっ！バカ!!」

「えつ？うわあああああ！！」

「ダダダダダダダ！」

それを助けるかのようにガトリングが放たれる

「マジかよ!?」

「パシパシパシパシ!!

だがそのガトリングの弾も全て受け止められる

「おいおい冗談じやねーぞ！殺意マシマシかよ!!」

「バラバラバラ…」

イクサは受け止めた弾を床に落としながら叫ぶ

「ちつ、なんだよあいつ！化け物かっ！？」

「ただ者ではないどころか私たちを軽くいなすか…」

「全部受け止められちゃいましたよー！どうするのー！？」

三人の少女はそれぞれの感想を飛ばす

イクサはその隙を見逃さなかつた

(攻め時かな?)

「一ダンツ!

「つ！くるぞ！！」

「わかってる！」

「一ダダダダダダ！！」

ガトリング少女がガトリングを放つがやはり弾は通り抜ける

「ちつまたかよ!!」

「下がつていろ！雪音！私たちが相手をする!!」

「クリスちゃんはサポートお願いい!!」

「あ、ああ！わかった！」

ガトリング少女以外が即座に反応し、指示を出す

(戦うのは面倒だし、あれで行くか！)

イクサはまだ床をけり飛び出して空中にいた青い髪の少女に向かつて振りかぶった拳をつきだした

「くつ私狙いか！」

「翼さん!!」

防人はその拳を避ける

がその瞬間には男は消えていた

シンフォギア 奏者S I D E

「また消えた!？」

「どこだ!?!」

「まだ近くにいるはず!!」

三人は周りを見渡すが男はない

「いないじやねーか!!まさか逃げられた??」

「そう簡単にここからは逃げられまい!どこかにいるはずだ!!」

「まだ、消えた…?」

短髪の少女は男が消えたことに疑問を持つ

「どうした立花?」

「いきなり現れて、いきなり消える…」

「なにいつてんだ?・このバカは…」

いきなり、考え出した短髪の少女にガトリング少女は呆れ、防人は共に考える

「いきなり現れて、いきなり消える…」

「…はっ! そうかその可能性もないわけではないのか!」

防人は思い付く

「どうした? 先輩?」

「すまないが静かにしてくれ雪音」

「え? あ、ああ…」

(ど、どうしたんだ先輩…)

ガトリング少女は己の先輩を心配する

防人は目を閉じ、精神を集中させる

「翼さん?…」

「…………そこか!!」

防人は斜め右後ろの壁に刀を投げる
すると

「ウエツ!? アブナツ!?

男がまた現れた

うそーん：透明化して空翔んでたのにそれを見りますか普通!? そんなもん空気の僅かな動きでしかわからんのにいい!!

「クソッタレ!! 透明化はもうダメか!」

「やはりそうか！ やつは透明になつていたんだ！」

「それが答えかよ！ 面倒だな！」

「それでも翼さんのおかげで出てきました！ また透明になる前にたたみかけましよう

!!

チヨーヤベーイ!! くそがあ！ それならこれだつ！

俺は右腕を左肩の近くまで持つていき、手の甲を前に向けてこう言い放つ

「ゼロ！ アクセル！」

(負担がデカいがしゃーねー！ ここから逃げるぞ！)

「今さら何をしようと無駄だつてわからねえのか!!」

一ダダダダダダ!!

ガトリング少女が持つてているガトリングを変形させ、今度はボーガンでエネルギー状の矢を放つ

(うそだろ!? こんな広範囲にばらまけるのか!? だけどもう遅い!!)

その矢が当たりそうになつた瞬間、

一ビツ!!

と音を立てて矢を避ける

「なつ!? また消えた!?

「いやつ…あれ私たちが視認できない速度で動いてるだけだ!」

「えー!? そんなことされたら対処できないじゃないですか!!」
三人の少女が焦るなか、俺は逃げる

(あと18秒! ちつ、ちょい飛ばすか!)

「それならば!」

「マリアさん! 2階層の防壁をとじてください!」

『わかった! 調!』

うそーん! この距離だとギリギリ無理だな…でもまあ頑張ってみるか!

ー2階層ー

うおおおおお!! 間に合ええええええええええ!!

「きたよ！ マリア！」

「わかつてる！ でもなんて速さなの？ 光しか見えないじゃない！！」

「ならこうするまでデース！」

大鎌の少女が鎌の刃を飛ばしてくる

（おせえ！ あと1秒）

間に合ええええええええええ!!

マニアワナカツタ：

そこには

「やつと姿を現したわね」

ポンコツ そうな女性と

「あの仮面：ちょっと感性がわからない」

一番えっちに見える少女と

「でもこれで捕まえられるデス！」

めつちやいい子 そんな少女がいた

アアアアアアアアアアアアアアアア!!もうヤケクソじやあああああああああ!!

「やつぱ、まだいたかシンフォギア奏者あ!!」

俺は叫ぶ、ヤケクソ気味に

その質問に答えたのは一番小柄な少女

「あなたは異端技術不法所持者…だから捕まえる」

「そんなことはどうでもいい、俺は速く帰らないと行けないんだ」

「そんな簡単に帰すわけないでしょ」

ですよねー(ˊΔˋ)

アイドル大統領さんよお…（映像データ参照済み）

「へへつ、私たちがいるかぎりここからは逃がさないデス！」
「だつたら問答無用で逃げさせてもらう！」

一ダンツ！

俺は地面を蹴り、飛ぶ

まだ防壁はしまつての途中だ、ならばギリギリで抜けられる！

「そうは！」

「させない！デス！」

小柄な少女と鎌の少女が鎌の刃と…なんだあれ!?丸い鋸かあ!?

一シユン!!

「危なつ！くつ！邪魔すんなあああ!!」

「邪魔しないわけないでしょ！邪魔しに來てるのだから！」

「上だとつ!?」

アイドル大統領が拳を振るう

(避けられる…けどこの方向なら問題ない！)

一ドツ！

「ぐあつ！」

俺は拳を避けずに直撃を受け、防壁へと落下する

ードガアアン !!

「ぶほつ！」

叩きつけられたことで肺の空気が押し出される

「ゴホツゴホツ…いつつ…」

俺が咳き込んでいるうちに防壁は完全にしまる

ーガタン！

「さあ、大人しく捕まるデス!!」

「捕まってくれれば痛くしないから」

「大丈夫よ、あなたを捕まえてもひどいことをしないから」

へへつ…冗談！

「残念でした♪トウツ！」

「「しまつ!?」」

防壁があつても無駄なんだよな…だつてすり抜けできるし

そう！今俺は壁をすり抜けたのだ！

『すり抜けたデース!?』

『調！早く防壁を!!』

『わ、わかった』

へつへつへつへ…よしこれで帰れ…

「大人しくしてもらおうか、盗人」

「いやだね、捕まるのは好きじやない」

いやあーあんたまでばつてくるのかよ指令さんよお

「というわけで逃げますね」

「ダツ!

「させません!」

「バン!!

「へつどこに打つてやがる?」

(な、なんだ体が動かねえ?)

「あまり俺も強制はしたくないのだが盗みはれつきとした犯罪だ大人しく捕まつてもら

う

んだこりや? 弾が影に…?

おっほ! これ現代忍術だ! (^o^)

しかもこれだけ制度の高い影縫いはじめてだ
だが:

「影縫いの対処方法は俺にはあるぞ現代の忍さんよ」

「なに!?」

「はああ!!」

「バアン!!

氣をちよいと解放するだけであら不思議、銃弾が弾けとびましたね

「それじや」

「逃がすか！爆震!!

「爆震！」

「なにつ!?同じ技だと!?!」

「震脚は広く武術に伝わつてゐるから基本なんだなー」

本来は攻撃の威力を上げるための歩方だけどな

しかし、直接攻撃に使つてくるやつははじめてみたぞ

「それではさよならー」

「シユン!!

「消えた!?」

忍と人間を超えた人間程度にこれは見切れんぞ

—1階層—

「よしこれで最：後？」

「久しぶりだな、あたしを助けてくれた人さん？」

「なんであんたが：いきてんだよ：あんたは一年前に死んだはずだろ：」

35 第2話 激闘？大脱出!! (´Д`)

天羽奏！
_

第3話 想定外をかかえて帰宅

三人称 S I D E

「なんであんたが生きてんのかね？ 天羽奏さん」

（あのとき、完璧にもとの状態に戻してやつたはずだが…）

二年前のライブでのことである。いい歌だったから気分屋なイクサは死にかけてた天羽奏を助けたのだ

それをきいた天羽奏は頭をポリツとかいてこたえる

「いやあーそれがな、あんたに治してもらつたのはありがたいんだが一定期間ごとにたおれちまう体になつちまつたからな、芸能活動もやめることにしたんだが急にやめるつてなつたら面倒だろ？だから死んでしまつたことにしたんだよ」

（いや、死んだことにするかよ普通）

「そんなことよりだ、あんたにはここで捕まつてもらう。出来れば話すだけで終わらせたい」

そういって天羽奏は槍を構える

「わりいな、それは出来ない話だ。こつちにはそんなに時間も残されてないしな」

「だつたら尚更速くお繩についてくれよっ！」
一ダツ！

そういうつて天羽奏は飛びかかつてくる

「だからそつはいかないつて言つてんだろ！」

一ガキンツ！

イクサは向かつてきた槍を腕のアーマーで防ぐ
そのままつばぜり合うイクサと天羽奏

一ギリツ

「だつたら力づくだあ！」

「やれるもんならな：ハア!!」

一ギイン！

イクサは槍を弾き天羽奏を後ろへ下がらせる
一ズザーツ！

「ぐぐつ!! なんて重い力だ：旦那より重いぞ!?」

「余所見してゐなら逃げるぞ」

一タツタツタツタ…

イクサは後ろに振り返り走り出した

「ちよつ…!? おいまでえ!! 逃がすかあ!!」

一ブンツ!

天羽奏は槍を投げた

「うえつ!? 投げるかよ普通!?!」

ースカツ!

イクサは軽々とその槍を避ける

「くそつたれ…逃げようにもここからじや海底しか……海底……そうだ! 海底だ!!」

イクサは逃げるためのなにかを思い付くが

「もう逃げれないぞ」

天羽奏がすぐそこまで来ていた

「確かに普通なら逃げれないな、でも俺は普通じやない」

「それは透明になることか? それとも視認できなほど速くなることか?」

「残念だがどっちも違うな…こうするんだ…よつ!!」

一シヤツ!

イクサは天羽奏に向かつて走り出す

「なにつ!? どこだつ!?!」

天羽奏は視界からイクサが見えなくなつたことで焦る

「ポン…

イクサは天羽奏の横腹に手を置き

「悪いな、ちょっと打撲のあとができるがゆるせよ」

「しまつ…」

「ズンツ！」

「ガツ!?」

「ドンガラガツシャーン！」

イクサは手から出した気合いで天羽奏をふきとばし、壁に叩きつけた

「グウッ！カハッ！ま、まだ」

天羽奏はすぐさま立ち上がるが

「じゃあな天羽奏、また機会があつたらあんたの歌を聞きたいよ」

イクサは海に向かつて走り出し、飛び込んだ

「ドボン！」

「まつ、まで…グツ！く、くそ…横腹が…」

「大丈夫か!? 奏くん!!」

SONGSIDE

「大丈夫か!? 奏くん!!」

「あたしは大丈夫だ…横つ腹に一発派手に受けただけだ…それより…」

奏は海のほうを向く

「やつは海から逃げたのか!? ここは海底だぞ!! いくら異端技術があるとは言え…」

「…………なあ旦那」

「どうした? 奏くん」

奏に呼ばれ、そちらのほうを向く指令

「あいつは戦つてる最中に時間がないって言つてた…たぶん別の何かをするつもりなんだろうな」

「時間がない…だと? 確かに逃げるのには時間がないのには理解ができるが…別の何か…か」

そうして二人は残りの全員が集まつてくるまで悩んでいた

オリ主ズ S I D E
ーザパツ!

「ふう…生きた心地がしねえな」

「相変わらずだな俺たち…」

イクサは深淵の竜宮付近の海に浮かべていた船にいた
そこには仲間であるアルトもいた

「まあ、とりあえずこいつは回収でしたからいいとしようか」

「パアア！」

イクサはその自身のコアの欠片を取り込む

「はあ…今回の失態は後の計画に支障ができるな」

アルトはため息をつく

「仕方ないだろ、やつちまつたもんは」

「そうだが…」

「結局あれをするには龍脈をいじるんだ、バレるのが早くなつただけさ」

「はあ…そうだな、じゃ今日は帰宅だな」

「帰宅」

「なにつ?!天羽奏があ!?!」

イクサから天羽奏が生きていることを聞き、驚くアルト

「定期的に倒れるんだそうだ、だから横腹に触れて天羽奏の体、解析して治してきた」

「で原因は？」

「俺が二年前に治した方法は肉体が異常でなければ死にかけでも完治するやつだったんだけど天羽奏の体はボロクソで異常だらけだったからそのときにやつた方法が肉体は治してるんだけど一部の細胞が灰になつたまま治らなかつたから正常だけど異常な体になつてたらしい、つまり俺のミスだ」

「あ、やつぱり？あの状況じや治すことに集中しづらいわな」

「まあ、そんなことは置いといてもう一度聞くが本当にこれ意味あるのか？」

イクサは机においてある東京の地図にかかれた円に指をさしてアルトに聞く

「ま、気休めにはなるだろ」

「意味ないつてことだな」

「まあ、あいつに怒られるのいやだし逃げれる時間があつた方が殺される人間も減るだろ」

「そうだな…………あと二週間か」

滅びの運命まであと14日

第4話 滅びへのカウントダウン

オリ主 s S I D E

イクサたちは拠点で話し合っていた

「さて、まずはどこの龍脈からいじる?」

イクサはアルトに最初に細工する龍脈をどこにするか聞く

「そらあここだろ、ここなら歌使いたちも次の次にどこに出てくるかわかんねえだろ」

アルトは机の上に広げている地図を指差しながらそう答える

「俺もそう思つてたところだ…ま、歌使いたちに邪魔されんのはしやーない…それに」「それに?」

イクサは大きなカプセルから小さな銃のようなものを取り出す

「こいつの完成には歌使いにこいつをぶちこむ必要がある」

「前から思つてたんだがそりやなんなんだよ」

アルトはイクサが秘密裏に作っていたものが気になつていた

その質問にイクサは答える

「こいつは、『聖遺物殺し』になる予定の液体を入れていいものだ」

「聖遺物殺しだあ？ それなら魔祓いの鏡でいいじやねーか」

「俺たちが神を相手にするには必要なさあ…まだ神の気は感じられないからなあ…そのための、な」

「神の気を感じられるようになるのに聖遺物が関係あるのか？」

「確かに普通なら不可能だろうよだが、歌使いの一人にこいつをぶちこめば方法はある」アルトは訳がわからなかつた

「んで？ その方法は？」

「利用してもらうのさあ：歌使いたちに」

「利用してもらう？ また他力本願かよ」

イクサは悩むように頭に手をあて説明する

「聖遺物はそのほとんどが神に関するものだ：どれだけ原点から離れていいよとな」

「それは分かる、それをどうしたら神の気を感じられるようにするのさ」

「今の俺達は戦闘民族だ、歌使いの気が感じられなくなれば次第に対応できる」

「てきとーだな」

「仕方あるまい？ 戦闘民族は不確定要素が多くすぎる」

そしてイクサは小さな銃のようなものをカプセルにしまう

「まあまだ試作品すら完成してないがな」

「いや、してないんかい！」

「こいつの効果は聖遺物を纏う人間に打ち込むことで聖遺物使用不可にする、そしてその打ち込んだ人間から血を取り出すと…」

「取り出すと？」

イクサはアルトに手の甲をみせ、次に手のひらを見せる

「まるで聖遺物使用不可にした効果が別物のように反転し、聖遺物の力を大幅に強化する液体に変化する」

「効果が反転させてどうするのさ」

「さつき聖遺物は神に関するものと言つたな、その力を神に近づける」

「神に近づけるだあ？ それは無理だろ元々神がつくつたものだ神の力とは別物なはず……そーゆーことか」

イクサはニヤツと笑う

「たぶんお前が思つてることが正解だあ…」

「ずいぶんわけわかんねえことすんなあ…」

イクサはパンツと手を叩く

「よおし、これで説明終わり！そらつ！行くぞアルトオ!!」

「やれやれ…」

イクサたちは準備をし拠点を出る

♪15分後♪

ーとある要石のある神社の近くの森の中ー

「どうだ、アルト？行けそうか？」

「へつ俺を誰だと思ってる！予定の時間より速く終わる!!」

アルトは地面に手をあてそう叫ぶ

「じゃあ俺は歌使いたちの足止めだな」

「頼むぞ、邪魔をされるとこの作業は止まつちまう」

イクサは仮面を取り出し顔にはめる

「今の歌使い程度の実力なら問題ないさ」「

「そうかい…なら始めるか」

一ピ。ポツー

SONGSIDE

「謎のエネルギー反応を確認！」

「場所は要石のある神社の近くの森です！」

「レイライン狙いだとお!?」

SONGのメンバーは謎のエネルギー反応が要石近くに出現し、驚いていた
「映像…でます！」

「ピコンッ！」

その映像に映るのは以前深淵の竜宮に現れた仮面の男だつた

「あの仮面はっ!!」

「あいつ！盗みの次は星弄りかよつ！やつてることの大きさが違いすぎるだろ!!」

そのときSONG本部にいたシンフォギア装者たちがそれぞれの反応を見せる

「だか見ろ雪音！あの仮面の男の後ろの森を！あのまるで炎のような色の光を！」
「煙は上がつてない…：ということはやつの協力者か？」

赤いシャツを着た男が指示を出す

「夜中で悪いが至急シンフォギア装者たちはあそこへ向かつてくれ！」

「「了解！」」

シンフォギア装者たちが出動したあと赤いシャツの男は考察する

「やつは時間がないと言っていた…それがレイラインに何かしらの関係があるのか?」

オリ主 s S I D E

「5分後」

「おい!そこの仮面!!」

「盗みの次は一体何をしようとしている!!」

「何かあるなら話してください!じゃないとただの悪い人になっちゃいますよ!?」

そんな叫びにイクサは冷静に返す

「ずいぶんと遅かつたじやないかあ…歌使いいい…」

そんな返しに防人が刀をイクサに向け

「もう一度だけ聞く!お前は…いや、お前たちは一体レイラインを使いなにをしようとしている!?」

と返す

「そう聞かれて答えるやつがいるか?」

「答えなきや力付くで聞くだけだ!」

イクサは困るような仕草をする

「やれやれ乱暴なやつだな…だがお前たちでは力づくで俺から聞き出すことは不可能

だ

イクサは黒い革手袋を外し、外した手の甲を歌使いに向け反対の肩あたりまで持つて
いく

「その理由はお前ら」ときじや俺は倒せないからだ

「なっ!? あれは手の甲に埋め込まれているのか?」

イクサの手の甲に浮き出ている十字の結晶をみて歌使いが驚く

「変……身」

するとイクサの全身から結晶が浮き出て体を覆っていく

全身を結晶が覆うと

一バキツー

一バキバキバキバキー

一バシユーンー

その姿は深淵の竜宮に行つたときの姿になつていた

「じゃお前らをここで足止めするまえに一つだけ」

「はあ? なんだあ?」

イクサは手を顔の前に持つていきギリギリと握りしめる

「もう時間がねえんだ! 邪魔すんなあ:!!」

「時間がないだと!?」

「なら何をしているのか教えてくださいよ!」

握りしめていた手をおろし警告する

「これ以上俺達に関わるな…失せろ…歌使い…ケガシタクナカツタラナア…」

「それでもだ!お前にはお繩についてもらう!」

そう啖呵を切った銀髪がエネルギー状の矢を放つ

「無理だと言っているだろう?」

ーシュンシュンシュンー

「やはり通り抜けるか…だが近距離ならば間に合うまい!」

防人が突撃してくる

「あつ!待つてください翼さん!」

それに続いて癖つ毛も突撃してくる

「無駄だ」

「はあああああああ!」

ーブンツー

ースカツー

イクサは防人の斬撃をよけ、そのまま防人の腹あたりに手を寄せ力を込める

「ふんっ！」

「一ドンツ！」

「くあつ！」

防人を気合い砲で横に吹き飛ばし、あとに続いてきた癖つ毛を相手にせる
「なんで答えてくれないんですか!? 言つてくれないと何もわかりません!!」

「バシッ！ バシッ！」

イクサは癖つ毛の打撃をいなしながら

「お前らは面倒なんだよ！だからあまり関わりたくないのさ！」

と言い癖つ毛の腹に手をあて力を込める

「しまつ…」

「はああ!!」

「一ドンツ！」

「うわあー！」

向くと

「く、くう…」

癖つ毛も吹き飛ばし、そろそろ防人が立ち上がり向かつてくると思いイクサがよこに

刀を地面に突き刺し、まるで大きなダメージでもくらったかのように震えながら立ち

上がろうとしていた

「おいおい……俺達はまだ力のちの字すら出しちゃいねーぞ？期待ハズレもいいところ
だぜ？」

「そうかい？だつたらこいつでも喰らつてろ!!」

「なつ！うしR…」

「ドドドドドドツ！」

ぐああああああああああああああ!!」

銀髪がイクサに小型のミサイルを大量に打ち込む

「先輩！バカ！大丈夫か!?」

銀髪の質問にさつき吹き飛ばされた二人が答える

「だつ…大丈夫だ…問題ない…」

「まつまだ生きてまーす」

その返答に銀髪は安心する

「なあ？人の心配はいいがまずは自分の心配をしろよ」

「し、しまつ…」

イクサはまた腹に手をあて力を込める

「ふんつ！」

「ドンツ！」

「ぐああ！」

銀髪を吹き飛ばし、吹き飛ばされた方を見る

「な、なんで…全部ちよ、直撃したのにつ…」

「ふん、あの程度で俺がダメージを食らうかよ」

「なら…さ、さつきの叫び声は…え、演技…かつ…」

イクサは歌使いたちに背を向ける

「この程度なら変身しなくても大丈夫そうだな」

『リフオメーション』

そのまま変身を解き、背を向けたまま歌使いに言う

「それじやあな、今日のやることは終わつたから帰らせてもらう…俺を捕まえたいなら
もつと力をつけてこいこれならあのノイズの方が強かつたぞ」

イクサは額に2本指をあてる

「ま、まてつ…！」

「ピシュー！」

55 第4話 滅びへのカウントダウン

滅びの運命まであと11日